

H 2 5 水産部門 水産土木 II-1-1

※1枚論文は実際の実務経験があるのか試しているようだ。したがって、業務で使っているがドライ等に基づき記入すればいいと思われる。日頃の業務の中でよくがドライ等に目を通しているかが勝負の分かれ目。

1 防波堤・泊地整備に伴う効果発現要因の分析

防波堤・泊地等が整備されることで、港内静穏度の向上や避難場所の確保等が図られ、地元漁船や外来漁船の年間出漁可能回数が増加することが期待される。本効果の発現要因として以下の内容が挙げられる。

ア 港口部静穏度の向上によるもの

港口部静穏度の向上により、出漁するのに微妙な波浪条件（例えば $H = 1.5 \sim 2.0 \text{ m}$ ）の時には、波の様子を伺いながら出漁可否の判断をしていたが、多少高い波高（例えば $H = 1.9 \text{ m}$ ）でも確実に出漁が可能となる。

イ 避難泊地の確保によるもの

出漁した後に天候が急変した場合に逃げ込める場所がないため、波浪状況の変化を伺い出漁可否の判断をしる状況で、漁場近辺に避難場所が確保されることにより、多少の波浪変化が予想されても出漁が可能となる。

以上、2点が挙げられる。

2 便益の算定方法

上記の効果発現要因から、便益算定の方法を下記の何れかで算定する。

- ① 漁可能回数の増加を漁獲量増加の可能性として捉えた場合の便益算定。
- ② 漁可能回数の増加を時間削減の効果として捉えた場合の便益算定。

3 留意すべき点

2つの算定方法は、出漁可能な時間の增加分を①では更に漁業に投下しようとするもの、②では他に投下しようとするものであるため、両者を同時に計上することはできない。

—以上—